

自己評価報告書

平成23年 5月12日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20730121

研究課題名 (和文) 核時代の国際政治とパグウォッシュ会議における日本の科学者の役割

研究課題名 (英文) The Pugwash Conferences and Japanese Scientists: A Transnational History of the Nuclear Age

研究代表者

黒崎 輝 (KUROSAKI AKIRA)

福島大学・行政政策学類・准教授

研究者番号：00302068

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：外交史・国際関係史

1. 研究計画の概要

(1) 本研究は、パグウォッシュ会議 (以下 PC と略称) とその日本グループの活動を主たる考察対象とし、トランスナショナル・ヒストリーの視点から核時代を捉え直そうという試みである。主な考察時期は、1950年代中葉から1970年代末までとする。これは、東西冷戦を背景として米ソ両国が熾烈な核軍備競争を繰り広げるなか、「恐怖の均衡」の下で平和の維持が図られた時代である。PCは、こうした国際環境の中で核の脅威の低減や世界平和の確立を模索し続けたトランスナショナルな非国家主体であった。本研究は、PCの活動の軌跡を跡付けながら、そこで日本グループが果たした役割や歴史的意義を検討することを目的とする。また、そのような非国家主体に焦点を合わせることによって、国家中心の冷戦史や国際政治史とは異なる視点から核時代の国際関係を描き直すことも目指している。

このような問題関心から、研究機関においては日本国内外での史資料調査を実施し、核軍備管理・軍縮問題へのPCの取り組みを実証的に解明する。特に核抑止を基礎とした軍備管理・軍縮の推進がPCの基本的立場として確立、定着するプロセスとその背後にあった政治力学を分析する。また、湯川秀樹と朝永振一郎という二人の科学者の足跡を軸に、日本グループの活動の実態を多角的に考察し、その歴史的意義をトランスナショナル・ヒストリーの観点から検証する。

(2) 上記の目的のため、研究期間を通じて日本国内外で史資料調査を進めながら、論文の作成・発表を行う。具体的にはパグウォッシュ会議の活動で中心的役割を担った科学者の個人文書を海外の研究機関で調査する。ま

た、日本グループの活動の実態を解明するため、同グループの中心メンバーであった湯川秀樹と坂田昌一の個人文書を調査する。こうした文書史料を補完するために日本グループの活動に関わった人物への聞き取り調査も行う。加えて、社会運動研究、戦略研究、軍備管理研究、冷戦史研究、日本政治外交史研究など様々な分野の先行研究の成果を活用してパグウォッシュ会議や日本グループの活動を多角的に分析するため、国会図書館や法政大学大平社会問題研究所などで史資料の調査を行う。

2. 研究の進捗状況

(1) 本研究にとって重要な史料の調査を米国で実施した。平成20(2008)年度は米国にて、マサチューセッツ工科大学 (MIT) 公文書館およびケネディ大統領図書館 (JFKL) の関連文書の調査を実施した。平成21(2009)年度も米国にて、シカゴ大学公文書館および米国立公文書館の関連文書の調査を実施した。パグウォッシュ会議は民間団体であるがゆえに、その活動の実態を明らかにするために必要な史資料には制約があるが、公刊された文献からは得られない、本研究にとって利用価値の高い情報が収集・調査した文書群には含まれており、その意味で非常に有益な調査旅行となった。

(2) 日本国内では平成21-22(2009-2010)年度に、京都大学・湯川記念史料室および名古屋大学・坂田記念史料室にて日本グループの中心人物であった湯川秀樹と坂田昌一の個人文書の調査を実施した。坂田文書は日本グループの活動を跡付ける上で非常に有益な資料であった。湯川文書は現在、文書の整理が進行中であり、再調査の予定である。

(3) さらに日本国内にて、パグウォッシュ会議に関連した史資料および、トランスナショナル関係論や社会運動研究、戦略研究、軍備管理研究、冷戦研究、日本政治外交研究に関する文献の調査を進めた。湯川らの下で長年日本グループの活動に参加してきた日本の科学者への聞き取り調査も実施した。

(4) 以上の史資料調査を踏まえ、研究成果を論文にまとめる作業も進めた。これまでのところ、1950年代中葉から1960年代前半のパグウォッシュ会議および日本グループの初期の活動に関する論文を作成し、学会誌にて発表した。また、その背景となった米ソ核軍縮交渉を米国に焦点を合わせて考察した論文を、学会誌にて発表した。論文として発表するには至っていないが、1960年代から1970年代のパグウォッシュ会議及び日本グループの活動に関する論文を作成する準備を進めた。

3. 現在までの達成度

①やや遅れている。

(理由)

平成 20-21 (2008-09) 年度はおおむね順調に研究を進めることができたが、平成 22 (2010) 年度に計画していた英国での史料調査が実施できなかった。ケンブリッジ大学のチャーチル公文書館にて、本研究の重要な史料と位置付けられる「ロートブラット文書」を調査する予定であった。しかし、年度途中で調査したい文書群が目録作成のために他機関に移管され、年度末まで利用できないことが確認され、調査を延期せざるを得なくなった。

また、本研究に利用可能な重要文書の存在が新たに明らかになった。すなわち、湯川秀樹の個人文書の調査を行った際に、それまで非公開であった文書を大量に公開する準備が進んでいることを知った。この文書群は本研究の水準の引き上げに寄与すると期待できるが、最終的な研究のとりまとめまでに取り組むべき課題が増えたともいえる。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 今年度中に積み残された課題である日本国内外での史料調査を行う。すなわち、今年度への繰越が承認された本研究費を利用し、英国にて「ロートブラット文書」の調査を実施する。そのための準備はすでに所蔵研究機関との間で進めている。また、日本国内では湯川秀樹の個人文書の再調査を実施する。

(2) この史料調査と並行して研究成果を論文にまとめる作業を進める。具体的には、①第2次大戦から占領期の核をめぐる国際政治への日本の科学者の対応、②1960年代後半から1970年代のパグウォッシュ会議の活動に

おける日本グループの役割、という二つのテーマで論文を作成する。また、本研究の成果の一部を今年度中に学会で報告する予定であり、その準備を通じて本研究のさらなる進展を図りたい。

5. 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 黒崎輝「日本における核抑止論批判の誕生——パグウォッシュ会議と日本の科学者、1954-1963年」同時代史学会編『同時代史研究』第2号、3-20頁、2009年、査読有
- ② 黒崎輝「米国の核優位への執着と全面完全軍縮、1959-1963」日本国際政治学会編『国際政治』第163号、41-54頁、2011年、査読有

〔学会発表〕(計1件)

- ① 黒崎輝「核優位への執着——ケネディ政権の核戦略と全面完全軍縮案をめぐる政策過程、1961-1963年」アメリカ学会第44回年次大会、2010年6月、大阪大学吹田キャンパス